

菅 茶山および諸家による華岡青洲の讃

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成29年1月20日／受理：平成29年7月13日

要旨：華岡青洲の在世中と没後の人々による評価を検討するため、菅 茶山らによる青洲の讃5篇を紹介した。最も古い讃は茶山により1820年3月に作られ、それは青洲の還暦を祝する詩であった。その讃は偶、前年の1819年8月に茶山の主宰する廉塾に入門していた青洲の長子雲平によって還暦を祝う青洲に届けられた。これらの讃は青洲に対する人々の評価を表しており、青洲の医術は「異術」、「神術」と考えられ、したがってその術を駆使する青洲は「神医」、あるいは「老人星」と崇拜されたことが知られる。これらの讃は当時の青洲の一つの社会的評価を示唆すると考えられる。

キーワード：華岡青洲、讃、菅 茶山、華岡雲平、社会的評価

はじめに

華岡青洲（1760–1835、以下「青洲」と略）に関しては、没後以来、医史学的研究の対象とされて多数の論考が発表されてきた。その最大の理由は、青洲が経口全身麻酔薬「麻沸散」（1820年代から「麻沸湯」と称されるようになった。「通仙散」は合水堂関係者による青洲の没後の呼称である）を開発し、それまで誰もがなし得なかった乳癌腫瘍摘出術を初めとする選択の手術を可能にして、外科領域に新境地を開拓したからである。とくに呉 秀三が1923年に「華岡青洲先生及其外科」¹⁾を上梓して青洲研究に画期的進捗を齎して以来、この呉の著は半世紀以上に渉ってこの分野のバイブル的存在であり、青洲を周知せしめた。その後上梓された青洲に関する著書^{2,3)}は、呉の著¹⁾の現代語訳、ないし現代語抄訳と見做しても過言ではなく、これまでに発表された青洲に関する多くの論考も呉の著書の一部の抄録といった感じが否めない。

1971年に著者⁴⁾が青洲による最初の全身麻酔

下の乳癌手術の期日に関して、呉の誤りを指摘して以来、呉の「華岡青洲先生及其外科」¹⁾の絶対性は揺らぎ始めた。さらに著者は、最初の全身麻酔下の乳癌手術の症例報告であり、青洲の業績を象徴する稿本「乳巖治験録」に関しても、呉の複製文は改竄されており、加えて呉が示した「乳巖治験録」の写真が合成されていることを指摘し、「乳巖治験録」を青洲自筆とする呉の説に批判的な見解を発表した^{5,6)}。以上のことは、呉の説に全面的に準拠してきた従来の青洲研究を見直すべき時期にきていることを強く示唆する。著者はこれらの青洲研究に関する新知見の情報を国内だけに普及するのではなく、海外に向けても発信する必要があると考えて、青洲に関する英文の著書を上梓したが⁷⁾、その反応は徐々に具体化しつつある⁸⁾。

しかしその絶対性は失われたものの、呉の著¹⁾は青洲の事績の殆どすべての面を網羅して、依然としてこの研究分野における最も重要な文献の一つであることに変わりはない。しかし、青洲の社会的評価、つまり門人ばかりではなく、一般の

人々が青洲をどのように評価したかに関する記述に乏しいことは指摘されよう⁹⁾。このような諸般の状況を考慮すると、青洲研究においては、改めてその思想を含めたその全体像を評価し直すことが必要ではないかと考えている。例えば、青洲の医の思想は標語「内外合一活物窮理」に凝縮されていると長年信じられてきた。しかし、著者は後半の四文字「活物窮理」のみが青洲の標語であることを明らかにした^{10,11)}。さらなる試みの一つとして、青洲の社会的評価の一面を示すとも考えられる青洲の讃を取り上げて、二、三の解説を試みたい。

1 青洲の讃に関する先行研究

これまでに発表された青洲に関する多くの論考のなかで、青洲の讃に論点を絞って考察を加えた論文は見当たらない。たとえ、著書、論文中に讃が引用されていても、何の解説も加えられず、単にそれを紹介するに留まっているだけである。

青洲の讃を最も早く引用したのは、前島淳一で1918年のことであった。前島は「華岡青洲先生ノ遺書」と題する論文¹²⁾の冒頭に後述する藤澤東咳の讃を掲げているが、説明、解説などは全くなされていない。前島の論考は、写本「舌診要訣」、「痢疾瑣言」、「鍼灸秘伝」が殆ど知られていないとして、これらを活字復刻したものであった。なおこの前島の論考¹²⁾に触発されて呉が青洲の研究を始めたことは、呉の著の序に明記されている¹³⁾。

最も多くの讃に言及しているのは、もちろん呉の著書であるが¹⁴⁾、それらの讃を単に紹介しているに過ぎず、それらについての解説は全くなされていない。とくに仁井田好古による讃は「華岡青洲墓誌銘」の末尾に示されて「為に其の治術の概略を書き、繋いで銘を以ってする」(原漢文)とあるので¹⁵⁾、多くの読者は讃を単に「墓誌銘」の末尾にしか過ぎないと理解して「讃」とは認識しないであろう。また呉の著書¹⁾の「附」は「春林軒門人録」と「青洲詩集」からなっているが、「青洲詩集」の末尾に示されている春林軒の門人森能の讃は、これまで研究者によって注目されるこ

ともなかった。

呉以後の青洲に関する著書として、森 慶三²⁾、藤本 篤³⁾の編書があるが、これらの中でも讃に関しては全く言及されていない。さらに前述したように、これまで発表された青洲に関する数百篇の論考で、讃のみに的を絞って論じた論文、さらには讃に言及した論文はない。讃においては、青洲の業績が二字、ないし三字の漢字に凝縮されて表現されているため、青洲についての二次史料を表面的に読んだだけでは、漢字に込められた深遠な意義を理解することが甚だ困難である。このことが讃の言及が皆無である理由である。以上述べたことによって、諸家による青洲の讃に関しては、見るべき論考は発表されていないとしても過言ではない。以下、讃が作られた順序に従って述べるが、讃であるから、当然その中には誇張が含まれていることを考慮する必要がある。しかし誇張の表現であるからこそ、その中に真実が包含されていることも考慮する必要がある。

2 菅 茶山による讃

菅 茶山(1748-1827、以下「茶山」と略)は、京都で和田東郭について医学を、市川某について古文辞学を学んだが、後に朱子学に転じて那波魯堂の門に学んだ。1781年頃、故郷の備後の國・神辺(現広島県深安郡神辺町)に私塾「黄葉夕陽村舎」を開いた。塾は後の1796年に福山藩の郷校と認められることになり、「廉塾」と称されたが、茶山はその経営に一生を捧げた。その間に多くの漢詩を作った¹⁶⁾。

後に青洲の春林軒に学ぶことになる備前・和気郡出身の赤石希范(1785-1847、字は宋相)は、1798年に茶山の「廉塾」に入門した。赤石の父士道と茶山とは友人であり、士道の書樓に「槐雨山樓」と名づけたのは茶山であった。この関係で赤石は茶山の許で学ぶことになったのであろうし、赤石が詩文、漢文を善くしたのは、茶山の薫陶よろしきを得たからであろう。赤石が茶山の塾に在籍した期間は明確でないが、1809年1月12日に再び茶山の許を訪ねて数日滞在した。赤石が

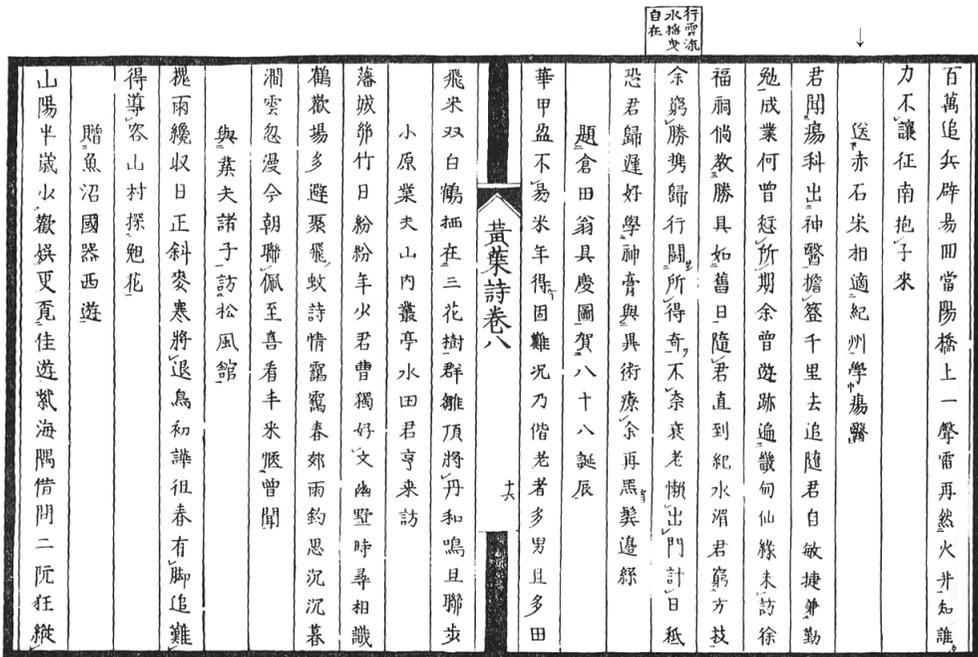


図1 「黄葉夕陽村舎詩」後篇（文政六年刊）卷八の十六丁表に、赤石に贈った七言古詩が披見される（↓印）。

紀州の青洲の春林軒に入門するに先だって、別れの挨拶を告げるためであった。赤石は乳癌手術の評判を聞いて青洲の春林軒に入門することを決意したのであろうが、茶山もすでに青洲の神医振りを耳にしていたと思われる。茶山は赤石に以下に示す「送赤石宋相適紀州學場醫上」の七言古詩を贈って、その門出を祝した。以下に原文と富士川英郎の読みを示す¹⁷⁾。ルビは一部に留めた(図1)。

君聞瘍科出神醫

君は瘍科に神医出ずと聞き

擔簦千里去追隨

擔簦千里 去って追隨す

君自敏捷兼勤勉

君自ら敏捷にして勤勉を兼ね

成業何曾愆所期

成業 何ぞ曾て期する所に愆わんや

余曾遊跡遍幾甸

余が曾遊の跡 幾甸に遍きも

仙縁未訪徐福祠

仙縁 未だ訪わず 徐福の祠を

尙教勝具如舊日

尙勝具をして舊日の如から教めば

隨君直到紀水湄

君に隨って直ちに到らん 紀水の湄に

君窮方技余窮勝

君は方技を窮め 余は勝を窮む

携歸行闔所得奇

携え歸って 行 得る所の奇を闔さん

不奈衰老懶出門

奈ともするなし 衰老門を出ずるに懶し

計日祗恐君歸遲

日を計りて祗恐る 君が歸ることの遅きを

好學神膏與異術

好し 神膏と異術を學びて

療余再黒髮邊絲

余を療し 再び黒くせよ 髮邊の絲を

この漢詩は茶山が赤石に送ったものであるから、もちろん青洲の讀ではない。しかし14句中2句において、青洲のことが読まれている。第一

句に「神醫」とあるのはもちろん青洲のことを指している。因みに「神醫」は不思議な力を持つ優れた医師の喩えである。青洲が最初に麻沸散を用いて乳癌腫瘍の摘出術に成功したのは1804年10月のことであったから、それから4年ほど経った1809年1月には、「神醫」としての青洲の名がすでに茶山の耳にまで達していたことが分かる。もっとも、茶山の許を、全国の文人、学者たちが訪問していたから、青洲についての情報も逸早く茶山の耳に達していたのであろう。第13句は青洲の医術を詠んだものであるが、「神膏」とは不思議な効果のある膏薬という意味で、この語は「後漢書華佗伝」に見え、華佗が用いたという膏薬である¹⁸⁾。青洲は「乳巖治験録」の中で「傳膏(膏を傳す)」と「膏」の語を使用している¹⁹⁾。もちろん青洲自身が自分の用いた膏薬を「神膏」と称することはあり得ない。同じく13句中の「異術」は字句通りに解釈すれば、通常とは異なった「並み外れて優れた術」ということになろうが、「異」には「異国」という意味も込められているかもしれない。そうすれば「異術」は「異国の術」の意も包含されているとも解釈される。青洲がオランダ流外科を学んでいるからである。いずれにせよ、青洲の医術は、当時一般の外科医のなし得なかった技であったことは確かで、「神膏」、「異術」の熟語はその状況を能く伝えており、決していわゆる舞文曲筆の類とは云えない。

かくして赤石は春林軒に入門した。「華岡青洲先生春林軒門人録」の備前の部に「文化六、三、二六 和氣郡吉永北方 赤石退藏(名希范字宋相)」とあるのがそれである²⁰⁾。赤石は入門してわずか2ヵ月ばかりして、青洲の乳癌手術の図譜の出版を計画した。出版して青洲の医術のさらなる普及を促進し、乳癌患者を救わんとしたものであった²¹⁾。残念ながら、赤石の計画は青洲の積極的賛意を得ることは出来なかったが、この計画、就中、図譜に付された赤石の序文を読んで、青洲は赤石の才能、とくに漢文の素養に甚く感動し、その赤石を指導した茶山に尊敬の念を抱いたと推察される。その根拠は、10年後の1819年8月に、青洲は長子雲平(1800-1832、名は直継、号は葛

城)を茶山の主宰する廉塾に入門させたことによって首肯されるであろう²²⁾。青洲が雲平の将来の大成を願って茶山にその素養の教育を託したのである。このことによっても、赤石の青洲に与えた影響の少なくなかったことが十分に理解されよう。なお赤石がいつまで春林軒で修行したかは知られていないが、1814年5月8日までには帰郷して医業に従事したことは確かである²³⁾。

廉塾の塾生となった雲平は、入門した翌年の1820年3月24日に一旦紀州に帰った。この期日については後に改めて言及する。青洲の還暦の祝宴に参列するためであった。雲平が紀州・平山の春林軒に至った正確な期日は明らかでない。当時は年齢を数えて算していたから、数えの61歳で青洲の還暦祝いが行われた。つまり1760年生まれの青洲の還暦祝いは1820年に行われた。「華甲の宴」である。茶山は青洲の華甲を祝す以下のような「紀州華岡国手の華誕」と題する七言律詩を詠んで、これを平山に帰る雲平に託した²⁴⁾(図2)。

紀州華岡国手華誕 號青洲

不怪君身專壽彊

怪しまず 君が身の壽彊を専らにするを

仙膏神術盡奇創

仙膏 神術 盡く奇創

應諳徐福采殘葉

應に徐福の採り残したる藥を諳るなるべし

非授華佗遺得方

華佗の遺し得たる方を授かれるに非ず

玉女祠臨蓬島近

玉女の祠 臨んで蓬島近く

金剛峰接杏林長

金剛の峰 接して杏林長し

若將眞訣弘傳世

若し眞訣を將つて 弘く世に傳えなば

何啻君身專壽彊

何ぞ啻に君が身の壽彊を専らにするのみならんや

「壽彊」は寿命の永いことである。「神医」と称された青洲が「壽彊」であるのには不思議はない

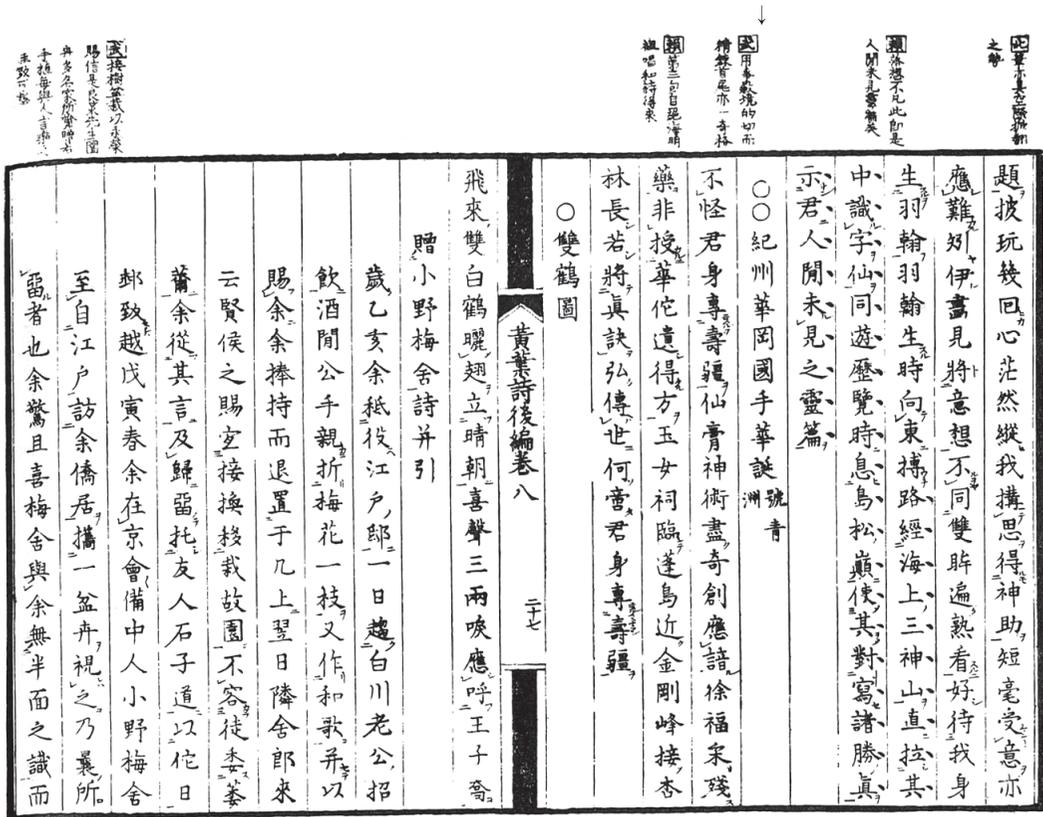


図2 「黄葉夕陽村舎詩」後篇（文政六年刊）巻八の二七丁表に、青洲に贈った七言古詩が披見される（↓印）。

が、それはきっと不老長寿の薬を得たという徐福が取り残した薬を知っているからだろう。それは名医華佗の遺した医術ではない。その方法を世に広めれば、青洲だけではなく、多くの人が長寿を享受できるだろうという意である。ここでは紙数の関係で、律詩についての詳しい解説は避けるが、第2、4、6、8句の句末で韻を踏んでおり、第3句と4句の頷聯、第5句と6句の頸聯が対句になっていることだけは記しておく。この律詩で、茶山は青洲の医術を「仙膏」、「神術」、「奇創」の語を用いて表現している。前述した茶山が赤石に送った七言古詩では、茶山は青洲の医術を「神膏」を用いた「異術」と表現しているが、ここではそれらを繰り返すことを避けて「神膏」に代わって「仙膏」、「異術」に代わって「神術」と表現し、青洲の医術が華佗の医術の模倣でないことを強調して、第2句末尾で「奇創」の語を使い、第4句で

「華佗の得たる遺方には非ず」と念を押している。これは青洲の寿を願った詩であるから、どうしても長生不老の薬を求めて三千人の童男童女と百工を従えて東方に船出したという徐福に言及しない訳に行かない。それが第3句であり、それを承けたのが第5句と第6句である。多少の説明が必要であろう。この徐福が至ったと伝えられる東方の地は中国、朝鮮、日本各地に分布しており、日本における一つが和歌山県新宮市の熊野川河口にある蓬萊山（海に面しており、山といっても標高50m）であり、近くの阿須賀神社境内には「徐福宮」がある。これを表現したのが第5句の「玉女の祠臨んで蓬島近く」で、対句にする必要があるため、同じく紀州にある金剛峯寺の存する高野山を「金剛の峰」と表現したが、これと医学、医術を意味する「杏林」は直ちに結び付かない。青洲の住む紀州は、無病息災を願う金剛峯寺が近く

にあって、海浜の徐福の祠と共に、長寿を願う地に相応しく、青洲の技に代表される医術が永遠であらうという風に解したい。

青洲の「眠っている間に、手術が終る」全身麻酔法は、当時の人々の目から見れば正に「神術」、「異術」とする以外に表現のしようがなかったのである。茶山の讃は、青洲没後の讃、そして青洲の門人による讃とは異なって、在世中の、しかも第三者による作であるが故に、より客観性に富んでいると評されよう。

富士川は茶山の日記、「文政三年(1820)三月二十六日」の条に「廿六、晴……紀州華岡隨賢の書来る」とあるとして、「これは茶山から右の壽詩を贈られたことに對して、青洲が感謝の意を述べたのだらう。」とだけ記し、何の疑問も差し挟んでいない²⁴⁾。前述したように、廉塾に学んでいた雲平は3月24日に神辺を出立したという。神辺から紀州の春林軒のある平山までは直線距離にして250km以上もある。徒歩はもちろんのこと、舟行して和歌山へ、そして紀の川を遡行して平山に至るにしても、少なくとも数日を要するであろう。雲平が3月24日に茶山から託された壽詩を携えて神辺を出発し、紀州の平山に到り、青洲が礼状を認めて、それが3月26日に茶山の手元に届くということは、どのように考えてもあり得ない。3月26日に茶山が青洲の礼状を受け取ったということは事実であろう。そうすれば、3月24日に雲平が神辺を出立したというのが誤りで、恐らくそれよりも少なくとも数日早く出立しているはずである。それを茶山が失念して日記の3月24日の条に記入したというのが実情ではないだろうか。雲平が茶山の廉塾に入門したことは、呉も含めたいずれの研究者も言及しておらず²⁵⁾、新しい知見である。残念なことに雲平がいつまで廉塾で学んでいたかは分からない。

この壽詩によって1820年3月に青洲の華甲の祝宴が開かれたことが明らかになったが、このことはもう一つの重要な事項の解明に繋がる。呉によれば、青洲の寿像は、青洲が71、2歳の頃、画家の丹波長續に描かせたという²⁶⁾。そうすれば寿像は1830年頃の作になる。しかし著者は青洲が

鎌田玄台に与えた1824年の寿像を発掘したし²⁷⁾、さらに1820年に描かれた寿像の存在も報告されて、青洲が還暦を迎えた際に作られたとされている²⁸⁾。上述したように、実際に1820年に「華甲の祝宴」が開催されたことは間違いないことは茶山の讃によって証明された。このことによって従来不明であった寿像の起源も明らかになった。これまでの調査では、1819年以前の寿像の存在は確認されていない。

3 森 能による讃

森 能(良齋、?-1846、以下「良齋」)は後に加賀藩の藩医となったが、1817年12月に春林軒に入門した²⁹⁾。池田³⁰⁾、津田³¹⁾は良齋の略歴を伝えているが、春林軒では塾頭まで務めたという。しかし残念ながら、良齋が退塾した時期は明確ではない。退塾に際して、青洲は寿像に「竹屋蕭然烏雀喧」の漢詩の讃を入れて良齋に与えた。良齋はこの寿像に対して「青洲先生寿像」と題する七言律詩を作った。呉は「華岡青洲先生詩集」の末尾に、良齋の律詩を収めているが、何の解説も加えていない³²⁾。この漢詩については、前著で紹介したこともあるので³³⁾、詳細な解説を避けて簡単に言及し、重要な点を指摘するだけに留めておく。

謹題 青洲先生壽像 門人 加州 森 能
 誕時奇感名依瑞
 誕時の奇感 名は瑞に依り
 果動乾坤如震霆
 果して乾坤を動かして しんてい 震霆の如し
 執法古今尤委曲
 法の古今を執りて 尤も委曲
 觀症表裏更丁寧
 症の表裏を觀て 更に丁寧
 調麻沸了功無敵
 麻沸を調べて 功を了めて無敵
 施截断来治有靈
 截断を施して 治を来して しるし 靈あり
 畢竟天為驅疾病
 畢竟 天為 疾病を驅し
 應知師是老人星

應に知るべし 師は是れ老人星

特に難しい語句はないが、第8句の「老人星」は南極星(Canopus)のことで、寿星とも呼ばれた。全天第二の輝星で、中国では人の寿命を司るといわれた。第1, 2句の首聯は青洲が生まれた時、俄かに雷鳴が轟いたという言い伝えに基づく。「震霆」は鳴り響くいかずちのこと。青洲の名「震」もこれに依る。第3, 4句の頷聯は、青洲の古今の処方を使いこなす治療と診察の丁寧さを詠い、第5, 6句の頸聯では、麻沸散(湯)の効果は絶大無敵であり、手術が極めて有効であることを示している。「調麻沸」(麻沸を調べて)と「麻沸」の語を用いていることも注目すべきであろう。「通仙(散)を整えて」ではない。第7, 8句の尾聯では天が疾病を駆除するために、この世に青洲を降したとし、それ故に青洲は人の寿命を司る「老人星」であると誉めている。

この漢詩が詠まれた正確な時期を知ることは出来ない。良齋が退塾に際して寿像を贈られたのは、彼は入門したのが1817年であることを考慮すると、10年経過した1827年以降ではあるまい。師青洲の讃が入った寿像を贈られて森は感激一入のものがあったに違いない。その感動を漢詩で表現したのが、上に紹介した律詩であるから、安易な即断は許されないが、詩が読まれたのも1827年以降ではあるまい。寿像を贈られてから数年を経て、良齋が詠んだ可能性は低いと考える。少なくとも青洲在世中に作られた詩である。

もう一つ説明を要する語句がある。それは第7句の「天為」である。「人為」に対する言葉で、天のしわざ、自然の働きのことである。「畢竟 天為 疾病を驅し」を表面的に解釈すれば、「つまり、天(自然)が(この世から)疾病を駆逐したので」となって、次の第8句の「だから青洲は人の寿命を司る老人星である」に円滑に繋がらず、説明もつかない。ここでの「天為」とは「天がこの世に青洲を降した」と解釈すべきである。古来、中国では、天が偉人を地上に降すという考えがあり、これは天子のみならず、偉人、医師についても当てはまる。例えば、春林軒の門人廣田 泌は

「続禁方録」を編纂したが、序の中で「上天、人において精を降し、以って世民を済生す」の語句を繰り返して使用し、これを青洲にも当てはめている³⁴⁾。したがって、この律詩の尾聯は「天の働きによってこの世に下された青洲が、精妙な医术を用いて疾病を駆逐したので、青洲は応に人の寿命を司る老人星である」と適切に解釈されよう。

4 仁井田好古による讃

和歌山藩の儒者仁井田好古(1770-1848、号は南陽)は、青洲研究者にとっては、「華岡青洲墓誌銘」を撰した人物として知られる。青洲が1835年10月に病没するや、遺族は仁井田に墓誌銘の作を依頼し、そして2カ月後の同年12月になったのが、広く知られる「華岡青洲墓誌銘」である。碑は、現在、和歌山県紀の川市平山の華岡家墓地参道の左側に建立されている。この墓誌銘については、呉の著書³⁵⁾を始めとして、「南紀徳川史」³⁶⁾、森らの編著³⁷⁾など多くの著で活字復刻化されているが、これらを含めて、これまで活字化されたすべての墓誌銘は誤っている。原碑文を確認せずに先行する誤った文献から墓誌銘をそのまま引用したからである。正確な銘文は拙著に掲載してある³⁸⁾。

軒岐之術	軒岐の術
泥經局方	經 <small>なす</small> に泥みて方に局 <small>ちじ</small> む
因循鋼弊	鋼弊 <small>こへい</small> に因循して
習而為常	習いて常となる
偉歎維君	偉 <small>か</small> なるかな 維 <small>これ</small> 君
洗剔一新	洗剔一新
救沈起死	沈を救い 死を起こして
海内稱神	海内は神と稱える
法傳後世	法は後世に傳えられ
遺澤在人	遺澤は人に在り
貞珉勒詞	貞珉 <small>みく</small> に詞を勒 <small>ま</small> したれば
千載曷泯	千載 <small>な</small> 曷 <small>ほろ</small> んぞ泯 <small>ぼん</small> ばん

四言古詞の形をとっているが、全12句である。内容的に第1~4句、第5~8句、そして第9~12句の3章からなっている。第1章では、軒轅と岐

伯以来の漢方の医術が、旧法に拘泥しているために、現在ではむしろ弊害になっていることを述べ、第2章では、青洲がそれらの旧弊を洗い去り、剔(そ)ぎ落として一新し、起死回生の術を開発して、神医と称されたとしている。第3章では、卓越した青洲の医術は後世に伝えられ、多くの門人を育成したのは恩沢である。青洲の業績を石に刻んだので、その功績は永久に減びないだろうという意である。「泥經局方」は墓誌銘文中の「世醫の論ずる所は、舊方に局み、經語に泥んで、之を活用する能わず」³⁹⁾を表現した句である。「貞珉勒詞」は少し解説を要する。「珉」は美しい石で、ここでは銘文を刻んだ碑石のことを指す。「勒」は石に文字を刻むことである。問題は「貞」である。「貞珉」の熟語はないが、「貞石」(硬い石)はある。「朽ちることのない石」と解釈できる。「朽ちることのない石に刻したから、青洲の名は千載に減びないであろう」というのである。四言古詩の場合、韻は不定であるが、この詩の場合、各章の偶数句尾でそれぞれ押韻が見られる。

5 藤澤東咳による讃

藤澤東咳(1794-1864)は、漢学者で通称昌蔵、字は元發、またの号は泊園。讃岐の出身で、六歳で中山城山に入門して徂徠学を学ぶ。長崎に遊学後、郷里の高松に塾舎守泊庵を開いた。1824年大坂に移り、淡路町に泊園書院を開いた。1864年、二条城で將軍徳川家茂に拝謁し、幕府の儒員に望まれたが、辞退し大阪に帰った⁴⁰⁾。以下に紹介する讃は「泊園文抄」に披見されるが、「泊園文抄」の正確な成立年代は明らかでない。しかし藤澤が大坂に移ってから「泊園」の語を含む「泊園書院」を開いたことを考慮すると、「泊園文抄」は藤澤が大阪に移った1824年以降の作であると思われる。呉は「泊園文鈔」に披見されるとして讃のみを示しているが、何らの解説も加えていない。ただし「藤澤東咳ノ青洲先生像讃ニ曰ク」とあるから、東咳が青洲の寿像を見て讃を作ったことになり、1820年以降の作であることが示唆される⁴¹⁾。東咳の讃は、後に男の南岳によって「東咳先生文集」⁴²⁾に収められたので、当該の部を因

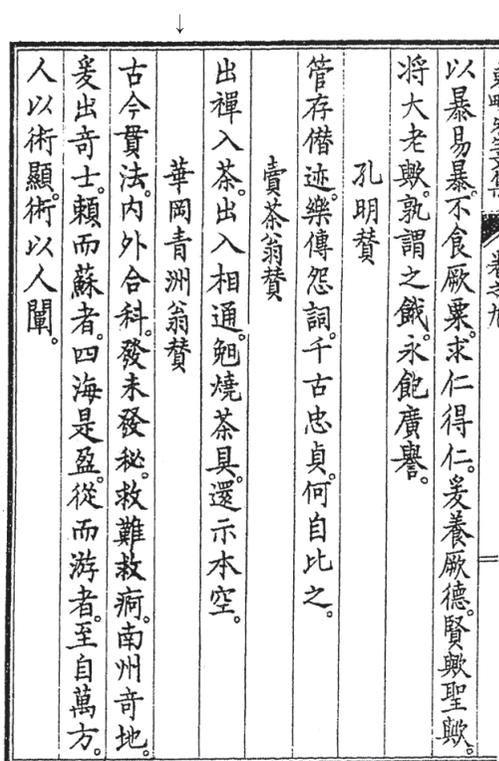


図3 藤澤南岳輯「東咳先生文集」巻九の一丁裏(↓印)。

3に示す。

古今貫法	古今に法を貫き
内外合科	内外に科を合わす
發未發秘	未發の秘を發して
救難救痾	難を救い痾を救う
南海奇地	南海の奇地
爰生奇士	爰に奇士を生む
頼而蘇者	頼りて蘇る者
四海是盈	四海、是に盈つ
從而游者	従って遊ぶ者
至自萬方	萬方より至る
人以術顯	人は術を以て ^{あら} 顯われ
術以人聞	術は人を以て ^{あらわ} 聞われる

四言詩の形をとっているから必ずしも韻を踏んでいない。全体として分かり易く、理解は容易である。最初の2句は青洲の医の哲学を表現したもので、「古今貫法」は青洲の言「欲療疾病當精其

内外。方無古今。唯在致其知。」や前述した「華岡青洲墓誌銘」中の「世醫の論ずる所は、舊方に局み、經語に泥んで、之を活用する能わず」³⁹⁾を意味している。「方無古今」を念頭に置けば、この讃での「法」は同音の「方」と読み替えても大きな誤りを犯すとは思われない。青洲の「方」に対する考えは、古今に通用するという意味に解釈したい。「内外合科」の読みについては、問題がある。この句は明らかに「華岡青洲墓誌銘」中の「遂唱内外合一、活物窮理之説」⁴³⁾に影響を受けていると推察されるので、「内外の合科」と読みたいが、漢和辞典を見ても「合科」の熟語はない。したがって「合科」は「科を合わす」としか読めない。青洲の内科、外科に対する考えは、その両者に精通することであって、「合一」つまり「合わせる」ことではなかった⁴⁰⁾。そして青洲の医術を表現するに「合」も文字を最初に使用したのは仁井田の「華岡青洲墓誌銘」であるから、その影響を受けたと思われる藤澤の讃がなったのは「華岡青洲墓誌銘」が出来た1835年末以降であると推定される。

「南海奇地」は春林軒のある紀州平山を指すが、藤澤が居住した大坂から見れば南に位置する。このことから、この讃は藤澤が大坂に移ってからの作であることが示唆される。末尾の第11句、12句も解釈は難しくない。青洲は乳癌手術で代表される医術によって広く世に知られ、乳癌手術は青洲によって世に知られるようになり、それは人々の済生に繋がるというのである。

6 今村了庵による讃

今村了庵(1814-1890)は幕末から明治初期にかけて活躍した漢方医であった。上州の人で、江戸に出て佐藤一斎に漢学を学び、多紀安叔について漢方医学を学んだ。さらに1846年に大坂の合水堂で華岡流の外科を研修した。1858年に江戸の瀬戸物町で開業したが、後に伊勢崎藩医となった。明治初年、大学で皇漢医学を講じ、漢方医学の復興に尽力した。「医事啓源」(1862)など多数の著書が知られている⁴⁴⁾。

今村に青洲の讃があることは、これまで青洲関

係の研究書では言及されたことはなかった。著者は偶然、今村が作った「華岡青洲」と題する七言絶句があることを知った。華岡の門に学んだ門人が、直接的に指導は受けなかったものの、偉大な師と仰ぐ青洲を称えた漢詩であるから讃としてもおかしくはない。この漢詩は結城 琢編「統和漢名詩鈔」⁴⁵⁾に収められているが、出典は明らかではない。著者も今村の著を種々調べたが、特定することは出来なかった。漢詩を以下に示す。

華岡青洲

洗腸刮骨起_沈痾_

腸を洗い骨を刮きて、沈痾を起こす

併_取華夷_窮_揣摩_

華夷を併せ取りて、揣摩を窮める

妙手無_人不_称誉_

妙手、人の称誉せざるはなし

今華岡即古華佗

今の華岡は古の華佗

分かり易い七言絶句であるから、詳しい解説は不要であろう。「華夷を併せ取りて」は青洲が漢方医学とオランダ流外科を学んだことを指している。「揣摩」とは真実を推し測ってそれに合致することを求める意であるが、ここでは診察、診療のことを意味し、それに熟達しているという意である。結句は「華岡」の「華」と「華佗」の「華」を掛けたものである。明治期の作詞であろう。

おわりに

青洲の社会的評価を知るために、菅 茶山、森能、仁井田好古、藤澤東咳、今村了庵による青洲の讃を紹介し、簡単な解説を加えた。茶山の讃によって、1820年に青洲の華甲の宴が開かれたことが証明され、これに関連して青洲の長子雲平が茶山の廉塾に入門していることも明らかになった。麻沸散を用いた全身麻酔下での手術によって、青洲の名は、4、5年の間で全国的に知れ渡った。青洲の医術は、仙膏、神膏を用いた異術、神術と見做され、それ故にその術を駆使する青洲は神医、そして老人星と称されて崇拝された。

参考文献および注

- 1) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京:吐鳳堂; 1923.
- 2) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲. 和歌山: 医聖 華岡青洲先生顕彰会; 1964.
- 3) 藤本 篤, 大久保萬知子編. 華岡青洲. 那賀: 那賀町華岡青洲をたたえる会; 1972.
- 4) 松木明知. 華岡青洲と藍屋利兵衛の母. 日本医事新報 1971; (2467): 120.
- 5) 松木明知. 華岡青洲の「乳巖治験録」の新研究(上, 下). 麻醉 2000; 49: 920-925, 1038-1043.
- 6) 松木明知. 「乳巖治験録」は青洲の自筆ではない. 日本医事新報 2001; (4038): 26-32.
- 7) Matsuki A. Seishu Hanaoka and His Medicine. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2013.
- 8) アメリカの Emily Bunker 氏は編集の仕事に携わっており, 医師ではないが, 父親の John Bunker (1920-2012) がスタンフォード大学医学部麻酔科の初代主任教授であった関係で, 麻酔科学の歴史, 中でも日本の華岡青洲に強い関心を持ち, 文献7に示した拙著に触発されて, これを一般読者向けに書き直す作業を著者の指導の下に行っている. 一般読者向けとしては, 英文で書かれた最も正確な青洲に関する著書となるはずである. ただし現時点で書名, 出版社は未定.
- 9) 呉は著書の中で(文献1. p.66-69), 青洲の業を高く評価する杉田玄白, 大槻玄沢の書簡を紹介しているが, それらは個人的宛ての書簡であり, 社会に向けて公開されたものではない.
- 10) 松木明知. 華岡青洲の医術と思想に対する謬説. 麻醉 2016; 65: 1184-1189.
- 11) 松木明知. 「活物窮理」の四文字が華岡青洲の金言である. 日本医史学雑誌 2016; 62: 439-444.
- 12) 前島淳一. 華岡青洲先生ノ遺書. 和歌山医学会会誌 1918; (8・9): 1-26.
- 13) 文献1. 序のp.11-12.
- 14) 文献1. で, 讃が紹介されているのは以下の頁である.
仁井田好古の讃: 87頁, 藤澤東咳の讃: 88頁, 森 能の讃: 青洲詩集 18頁.
- 15) 文献1. p. 87.
- 16) 富士川英郎. 解題「黄葉夕陽村舎詩」. 富士川英郎, 松下 忠, 佐野正巳編. 詩集 日本漢詩 第9巻. 東京: 汲古書院; 1985. p.3-7.
- 17) 富士川英郎. 菅 茶山(下). 東京: 福武書店; 1990. p.4-5.
- 18) 三国志(二十四史) 二九, 魏書 二九 方技伝 華佗伝. 北京: 商務印書館出版; 1958. p.389-392.
- 19) 松木明知. 華岡青洲の新研究. 弘前: 松木明知; 2002. 巻頭に「乳巖治験録」のカラー写真を示しているが, 5丁裏(正しくは6丁裏)に「而後以糸縫其創口及傅膏」とある.
- 20) 文献1. p. 487.
- 21) 松木明知. 春林軒門人赤石希范による乳癌手術図譜出版の計画. 日本医史学雑誌 2016; 62: 305-314.
- 22) 文献17. p. 424.
- 23) 文献17. p. 136.
- 24) 文献17. p. 430.
- 25) 文献1. p. 106-107.
- 26) 文献1. p. 87-88.
- 27) 松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京: 真興交易(株) 医書出版部; 2013. 163-167.
- 28) 和歌山市立博物館編. 特別展 華岡青洲の医塾 春林軒と合水堂. 和歌山: 和歌山市立博物館; 2012. p. 43.
- 29) 文献1.p. 473.
- 30) 池田仁子. 金沢城代横山家出生に見る家臣と医者と女性. 金沢城研究 2008; (6): 121-134.
- 31) 津田進三. 華岡青洲と加賀藩. 石川郷土史学会々誌 1970; (3): 1-5.
- 32) 文献1. 「華岡青洲先生詩集」. p. 18.
- 33) 文献27. p. 167-169.
- 34) 廣田 泌. 「続禁方録」序. 「続禁方録」(華岡青洲先生遺教 春林軒二十一種 十二集)(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 3169-20)
- 35) 文献1. p. 85-87.
- 36) 堀内 信編. 南紀徳川史(第6冊). 東京: 南紀徳川史刊行会; 1931. p.535-536.
- 37) 文献2. p. 49-50.
- 38) 文献27. p. 45-55.
- 39) 文献27. p. 48.
- 40) 笠井助治. 近世藩校に於ける学統学派の研究(下). 東京: 吉川弘文館; 1982. p. 1384-1385.
- 41) 文献1. p. 88.
- 42) 藤澤南岳輯. 東咳先生文集(巻九). 大阪: 泊園書院; 1884. 一丁裏.
- 43) 文献27. p. 49.
- 44) 松木明知. 今村了庵と「医事啓源」(1862)―“麻沸散”の処方公開した華岡塾の門人とその著書―. 麻醉 2017; 66: 201-205.
- 45) 結城 琢編. 続和漢名詩鈔. 東京: 文会堂; 1915. p. 615-616.

Chinese Poems on Seishu Hanaoka by Chazan Kan and Others

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Five Chinese poems by Chazan Kan and others were written in praise of Seishu Hanaoka before and after Hanaoka's death in 1835. Among them the earliest inscription was composed by Kan in March 1820, celebrating the 60th anniversary of his birth. According to Kan's diary, it is clear that Umpei Hanaoka, the eldest son of Hanaoka, enrolled at a school called "Renjuku" run by Kan in August 1819. Kan left the poem with Umpei, who returned to his hometown Hirayama to join the banquet party in celebration of the anniversary. A careful examination of these poems indicates that Hanaoka's surgical procedures were highly appreciated as "extraordinary arts" or "divine techniques," therefore, Hanaoka was respected as a "divine doctor" or the "Canopus" which brings us a long life because he had a perfect command of those arts and techniques. These poems are thought to express the social recognition of Seishu Hanaoka at the time.

Key words: Seishu Hanaoka, inscriptions, Chazan Kan, Umpei Hanaoka, social recognition